

産霊むすびの信仰

今日は産霊の信仰についてお話しようと思う。むすびは漢字で書くと、産霊の字を宛てている。神の名で言えば、日本の神代かみよの初めに現われる高皇産霊・神皇産霊かみむすびが、その名の通り産霊の神である。その他にも、産霊の神が相当にある。ではこれら産霊の神の信仰は、どういうものであつたらうか。現在、我々の信仰しつづけている神道は、言わば、宮廷神道に若干の民間神道の加わつたものがつづいてきているわけだが、産霊の神の信仰になると、少し特殊なところがある。その点をお話して、あなた方に注意してもらいたいと思う。産霊の神は、天照大神の系統とは系統が違うので、その点をはっきりしておかないと、考えが行き詰まつてしまう。なお、今一つ注意しておかなければならないのは、縁結びの神である。近世、男女の名前と年齢とを白い紙に記して、社寺の格子戸とか境内の木の枝などに結びつけて、夫婦ちごりの契を祈る風習が広く行われたのが縁結びの神の信仰で、これはだいたい、むすぶむすぶの神と発音されている。

これと産霊の神との関係はどうかという事になるのだが、産霊の神に対する信仰が浅くなつて後に、その中へ縁結びの神の信仰が入つてきたので、この両者は、しばらくは別にして話さなければならぬ。

それでは、一体、産霊とはどういう事だろうか。今、その神道的な使い方から遠のいて、普通に我々が使つてゐる近代のむすぶという事を考えて見ると、同じ物の両端を結びつけるとか、違つた物を一点に結合させる場合に用いており、具体的に言えば、たとえば、木の枝を結ぶとか、枝に物を結ゆえつける事と考へてゐる。では、こうしたむすぶという動作は、何のためにするのかという事になるが、ここにもう少し違つた、特殊なむすぶの使用法がある。つまり、水を掬すくぶという事である。水を掬すくつて飲むまでの動作をむすぶと言つてゐる。この掬すくぶと、物を結合する結ゆぶとは、関係がありそうだ。これは、元來、ある内容のあるものを外部に逸脱しないようにした外的な形を、むすぶという言葉で表現した点に共通する所があつて、それが、信仰の消えた後も、動作を表すのに、むすぶという言葉を使用して來てゐるといふ事になる。

水を掬ぶは、信仰的に言つと、人間の身体の内へ靈魂を容れる・靈魂を結合させるといふ事らしい。そうすると、その人間が非常な威力を發揮して來るわけで、その作法として、水を掬ぶという事をしたのである。つまり、水の中へ靈魂を容いれて、それを人間の身体の中へ容れるというのが、産霊の技法だつたことになり、そういう意味で、むすぶという言葉が、水を掬つ

て飲む動作にも用いられているのである。しかし、現在では、そうした産霊の精神的な内容は、失われてしまっている。が、たとえば、万葉集に見られるむすぶは、近代的に解釈してもわかる——もちろん、古典は近代にもわかるというところに、一つの価値があるのだが——ものの、それでは本道の古典の正しい訓み方という事にはならず、用語例で見ていくと、そこに特別な意味が見出されるのである。それで、万葉集の歌を挙げて、むすぶの説明を試みよう。

磐代いはしろの浜松が枝を引き結び、まさきくあらば、復また帰り見む（卷二、一四一）

「自分は今、この磐代の浜を通るが、とても再び引き返して、ここを過ぎることは出来まい。今、世の人がするように、浜の松の枝を結び合せて、ここにいらつしやる道の神に、自分の命や旅路の無難を祈って行くが、その祈った通りの効果が現れて、万一無事に健康でいたならば、再びやって来て、この松を見よう」の意で、これは、道の神の前を通る時、その道の神に挨拶をし、物を与えて通るといった、当時の信仰生活の現れた歌である。紀州日高郡磐代の崖がけの下には、道の神がおり、そこを通る人は、その神に障さわられるので、物を与えて通らなければならなかった。この道の神は、現在我々の考えている神以下の神で、木霊コダマ・魍スダマ魂といった、言わば精霊で、最近では、でもん・すびりつとという外国語を用いた方がわかりやすくなっている。

では、何を与えるかという、特別にそうした神々の欲しがるものがある。それが靈魂で、靈魂の一部分を与えるということになる。この信仰は、日本では今でも続いている信仰で、始めは靈魂を与えることだったのが、その容れ物を与えるという形に段々なつてきて、幣ぬぎを与えるという習慣になつてくる。元来、靈魂を与えるのが、やがてその包み物を与える・物質を与えるというふうに移して来たわけだ。だからたとえば、褌みそぎ・祓はらえの時に、その穢けがれた衣を介添えをした下級の神官が拝領するのは、貴い方の身体の外へ放出された靈魂——穢けがれた靈魂・草臥びれた靈魂——をもちうという形で、その靈魂は、貴い方自身には意義がなくても、下級の者にとつては、効果のある事と信じていたのである。あなた方は、神道のために努力して頂くのであるから、こうした信仰を信じなければ、意味がない。これは、神職として精神的に持つていなければならぬ事で、決して迷信ではないのだ。この歌は有間皇子ありまのみこの歌で、皇子が謀叛むほんを起こしたという讒言ざんげんによつて捕えられ、折から牟婁むろの温泉（今の白浜温泉の附近。鉛山の温泉）に行つておられた斉明天皇の許へ召されて行く途次、磐代の神に、靈魂の一部を分割して与えられた時に詠まれたものである。「浜松が枝を引き結び」という事は、浜の松の枝に自分の分割した靈魂の付着したものを結びつけられた意で、松の枝に鎮魂的な処置をしたという事になる。つまり、当時にあつては、この信仰は日常茶飯のことであつたために、むすぶという言葉だけで、充分内容を受け取る事が出来たわけで、あえて廻りくどい説明を要しなかつたのであ

る。しかし、この歌は早くから誤られ、磐代の結び松という歌枕になって、万葉集自身でも、既に、

磐代の野中に立てる結び松　心も解けず。いにしへ念ほゆおも（卷二、一四四）

といった歌に見られるように、誤解があるようだが、決して、単に松の枝を結んでおくという事ではなかったのである。

牟婁の温泉に赴いた有間皇子は、斉明天皇並びに皇太子のなかのおおえのおうじ中大兄皇子に対面した後、磐代の神に祈願した通り、再び磐代の松を見る事ができたのだが、そこを通過して間もなく、ついに、藤白坂の山中で絞殺された。昔の神道では、身体から血を流すのが穢れで、血を出さないで死ぬ方法を取った。その一方法が絞殺で、刃物を用いる事は絶対のたぶうであつたわけだが、この話には長い説明が要るので、今はそれを述べる暇がない。ともかく、こうして、もう一度磐代の松の前を通過させて後に殺してしまうという事については、恐らく、当時の人には理由があつたに違いない。つまり、当然牟婁の地で殺されるはずの皇子を、もう一度磐代の地まで無事に送り届けたという事は、そうしなければ、皇子の祈願を受けた磐代の神が神としての權威を喪失してしまうと考えていたからである。こうして、磐代の神は、有間皇子への義理を立て